

令和3年度第1回北海道立帯広美術館協議会議事録

- 1 日 時 令和3年(2021年)8月5日(木) 13時30分から16時00まで
- 2 会 場 北海道立帯広美術館 講堂
- 3 出席委員 吉田真弓(会長)、加賀学(副会長)、能戸貴英、石崎庸之、原田純子、橋本雄大、柳田祐子、持田誠、大河原茂美、中村博明 計10人(欠席 後藤眞美子、土井裕子)
- 4 事務局 野崎弘幸(館長)、石黒千栄子(副館長)、福地大輔(学芸課長)、早坂隆広(総務課主査)、砂子澤まりあ(総務課主事)、菌部容子(主任学芸員)
- 5 傍聴者 なし
- 6 議 事
館長挨拶、委員及び美術館職員紹介、展覧会鑑賞、会長及び副会長の選任のあと会長の進行により議事に入る。
 - (1) 会長及び副会長の選任
 - (1) 令和2年度事業の実施状況及び美術館評価結果について
 - (2) 令和3年度事業の運営計画及び美術館評価(目標指標)について
 - (3) 協議・意見交換
- 7 会議記録
 - (1) 会長、副課長の選任
事務局案を提示し、会長に吉田委員、副会長に加賀委員を選任
 - (2) 令和2年度事業の実施状況及び美術館評価結果について
事務局より説明、質疑なし
 - (3) 令和3年度事業の運営計画及び美術館評価(目標指標)について
事務局より説明、質疑なし
 - (4) 協議・意見交換
最初に欠席委員からの意見等を紹介し、事務局から回答(別紙のとおり)
委 員：学校との連携事業は、令和2年に3回実施しているが、コロナ禍のなか例年どおり実施できたのか。
浦河第一中学校の参加者20名の鑑賞は、自主的なものか美術館の事業として実施したものか。
美術館評価は誰が行っているのか。
事務局：コロナ禍で学校から外に出る事業は減っており、昨年度は大幅に影響を受けた。
学校に向いての授業や課題を作って展覧会でそれを解いていくというような事業は一部影

響があったが、団体観覧件数に比べると影響は少なかった。

連携事業の項目は充実度の高いものを掲載しているが、回数が減ったのは残念な結果である。

浦河第一中学校の展覧会鑑賞は学校の方でプランを立てて来館してくれた。

美術館評価については、美術館で指標を設定し、美術館で評価を行っている。

美術館評価制度は5年目になり、評価が曖昧な部分があるとして全庁で話し合われているところ。定量評価、定性評価の基準が曖昧であり、館によって齟齬あるのが現状。評価の一定の基準を全道的に定めるため、本庁中心で動いている。評価制度自体が変わっていくことを伝える。

委員：評価の仕方自体を変えるのか

事務局：各館で目標を立てて各館で評価するやり方は変わらない。評価のプロセスにおいて各館で齟齬がないようにする。たとえばBを付けるための最低限の基準を設けることなどを全庁的に進めている。

委員：外部評価の話はないのか。

事務局：自分たちで評価することは好ましくないが、現状としてはこのままではないか。本来は協議委員が評価することが妥当だと思う。

委員：外部評価はあったほうがいい。

委員：評価ではアンケート結果をもとに満足度が掲載されている。アンケートは入館者に対してどれくらい回収されているのか。自由記入欄があると思うが、特筆される意見等があるのか。

事務局：回収率は出していない。自由記入となっている。回収数は1日数枚程度となっている。入館者数が1日4、5百人の時は十数枚回収するときもあった。

委員：そもそも関心が高い方がアンケートに回答していると思うので、満足度数にバイアスがかかり、評価に用いるには適切な数字にはならないのではないのか。アンケートに記入している段階で満足度は高い。

収蔵作品は825点あるが、収蔵庫の狭隘率はどうなっているのか。どの程度空いていて、どれくらい詰まっているのか。収蔵環境に対する評価が低めで、収蔵庫の格納の問題だと思うが、どのような課題があり、それをクリアするためにどのような検討をしているのか。

事務局：指摘のとおり収蔵庫は大変手狭になっている。当館で収蔵している作品は巨大なものから映像作品、データのように実態のないものなど様々であるため、数字で出すのは難しい。開館当時からある棚等はすべて埋まっている。一昨年収蔵庫内に棚を増設したが、それももう埋まった。収蔵作品は年々増えていくが、収蔵庫が埋まったからといって収集をやめるわけにいかない。美術館の役割として十勝の美術の歴史をたどれるよう作品を充実していく必要がある。地域の作品を見せて行くためにも収集を続ける必要があるが、ますます手狭になっている。根本的な解決策は増築をすることだが、簡単な話ではないので頭を抱えている。

委員：保管状況の適切さという課題についてはどうか。

事務局：保管状況の適切さの指標として温度、湿度の管理がある。これに関しては老朽化が進んでいるが、可能な限り機材の更新・交換を少しずつ進めている。収蔵庫が手狭になってきているので、安全に保管できる環境には気をつけているが、もう少し余裕のある保管環境を作れないか課題となっている。

- 委員：保管状況の適切さがCという評価は、おおむね収蔵庫の狭さに起因するものなのか。
- 事務局：評価の基準で言うと、A評価は非常にゆったりした環境で空調性能もよく余裕のある状況である。
- Cはなんとか及第点に達しているという状況。Cだからといって深刻な問題を抱えているという意味ではない。
- 委員：収蔵庫の問題は帯広美術館単独で解決できる問題ではない。道として計画的に取り組まなければならないと思うが、現場の問題として道立美術館全体の中で意見を出したりできるのか、道教委全体として計画を持っているのか、情報があれば教えてほしい。
- 事務局：道立美術館全体で収蔵庫の狭隘は問題になっている。
- 委員：狭隘率は出しておいたほうが説得力があるのではないか。要求するときには数値で示したほうがいい。
- 事務局：収蔵庫の内のりに対してこれだけ埋まっているという数字は出せる。
- 委員：令和2年度も緊急事態宣言で休館や入場制限があった。昨年の春先は何が原因で感染が広がったか分からない状況で、疑わしきはすべて止めることが最優先だったと思う。コロナとつきあって行く中で、今年の5、6月もすべての公共施設を休館する判断だったが、マスクをしておしゃべりしない、作品を見るという美術館が全て同様に休館する必要があったのか。文化的な空間でクラスターが発生しないような施設は開館するという判断になってくればコロナと共存できるのではないか。
- 事務局：社会全体が日常的にコロナ対策をとれる状況になり、美術館も感染防止対策を徹底して開館すれば喜んでもらえると思う。
- 委員：道立だから道として統一したルールを守らなければならないこともあると思う。しかし、札幌とそれ以外のコロナウイルスがそれほど蔓延していない地域で、閉館・休館基準等に差を付けられないのかとも思う。
- アンケート評価については、NHKでもイベントや展覧会の際に実施している。ただ、わざわざいらしたのだから満足度は高くなる。その評価だけでは足りないのではということで、NPS（ネットプロモータースコア）を評価基準に取り入れた。「今回のイベントを家族・友人・知人にすすめたいと思いますか」という他者奨励度の質問をしている。回答は「非常にすすめたい」から「全くすすめたくない」までを10段階の数字の中から選んでもらうが、奨励度の高い9、10でないと合格としない厳しい評価をしている。
- この2年間のコロナ禍で感受性豊かな子ども達に文化芸術に触れさせる機会が失われた。子ども向けの事業に努力されているようだが、これからも特に子ども向けの事業に力を入れてほしい。子ども達が芸術文化に触れる機会を提供することに期待したい。
- 事務局：美術館のアンケートは、展示内容、環境、職員の対応などについて5段階での選択方式をとっている。回収率がどうなのかという問題もあるが、このような形で評価につなげている。公立美術館はある程度の制約は仕方ないと思うが、札幌の近代美術館も全館休館となるころだったが、一部の特別展を開館している状況にある。その館で判断できる部分もあるので、帯広美術館においても同じような取扱ができるよう努力する。

委員：資料でフェイスブックなどの SNS を活用していることを確認した。時代に応じた使い方を研鑽していく必要がある。すでに使われている手法かもしれないが、ハッシュタグ、インフルエンサーはフェイスブックでうまく使える手法である。

現在、道東地区には宇宙に関する展望がある。宇宙を意識したらどうか。天文台やベンチャー企業との連携を考えると道東地域の発展につながるのではないかと。

美術館に期待することとして、豊かな人間性を育むためお堅い意識にとらわれない事業を期待している。

帯広に美術館があるということを世界中に発信するよう取り組んでいただきたい。

事務局：SNS を使った広報については、年々フォーマットが変わるので、状況に応じた広報活動を続けてきた。2002 年にメールマガジンを始め最近まで続けてきた。2012 年からフェイスブックを始めたが、あまりハッシュタグは多用していない。道の規則上インスタグラムのアカウントは開設できないが、新聞社と一緒に開催する実行委員会展では個別にアカウントを作り、特設のインスタグラムを開設したりするなどして広報している。

宇宙については、2 回続けてロケット打ち上げに成功しており、これからも話題になることだと思う。宇宙開発はいろいろな技術、発想の集積であり、人間の想像力が一番凝縮されたものだと考える。アートにつなげられないか、宇宙に限らず幅広い分野を発信していくことも美術館の役目だと思う。

委員：手島圭三郎展はコロナで休館になったが、最後の 1 週間位開館した直前に NHK で放送された後、来館者数が増えた。毎年開催する 4 本の展覧会は事前に日時が決まっているので、新聞広報だけでなくタイミング良く映像を使った宣伝ができないか。

以前は、子ども達を対象にした展覧会や展示室の中だけでなくロビーでお絵かきするなど身体を使った取組があった。ロビーで子ども達が生き生き活動している様子を見ると元気づけられる。親子で楽しめる展覧会や子ども達が活動できる取組を提案したい。

事務局：6 月の手島圭三郎のドキュメンタリー番組の放送時期は偶然の一致だった。2 年前から撮影収録が始まったもので長時間かけて作られたものと聞いている。ちょうど展覧会の会期中に放送されると聞いたので、展覧会について触れてもらえないかお願いした経緯があった。最後の 1、2 週間で想像以上の来館者があったことは、テレビの効果が大きかったと思う。また、そのような機会がくれたらと思うので、美術館の活動がメディアに注目されるよう努力する。

子ども向けの事業については 90 年代、2000 年代にロビーを使った大がかりなワークショップや公開制作など多く開催していた。当時の講師の方々の高齢化を考えると新しい世代、体力、指導力のある作家を探さなければならない。コロナ収束後どうしたら新しい展開ができるか情報を集めていく。

委員：是非前向きに検討していただきたい。

委員：子ども世代を引き寄せ、活性化の軸におくことは皆さんの共通認識だと思うが、具体的にどうするか掘り下げた話をしないと実際に進まないのではないかと。子ども達は夏休み、冬休み

は時間があり課題もある。美術館で何かしたいと思う人も多いと思う。道東地区には有名な作家がたくさんいる。また、十勝管内は食のイメージがあるので、それを作る道具、普通に売っていない、包丁やアイヌ工芸のように作家がこだわって作るものを作れる機会を子ども達に提供してはどうか。1日だけでなく1週間、2週間続けければ子ども達が集まると思う。ポスター展のような子どもが興味ないもの、どのように関心を持ったらいいか分からないものは大人目線で考えても分からない。書いていることが分からなければ興味は持たない。ユーチューブなどで子どもと美術館職員が会話形式で宣伝する、絵の特徴などをQ&A方式で紹介するなど、低学年でも分かる言葉で宣伝すれば必ず興味をもってくれると思う。新しいコンテンツを作っても喜びがなければ客は来ない。子どもが笑って喜ぶことを考えてほしい。

ヨーロッパには、絵画、彫刻がたくさんある中にビーチバレーコートがある喫茶店があった。スポーツと芸術と食を親子で一緒に楽しむ場所がある。ヨーロッパは違うと思った。人が集まる場所はこういう所なんだと思った。大人も子どもも一緒に楽しむことを念頭に組み込んでほしい。

美術館に行ったときに「この風景はどこにいったら見られるの」と思ったことがあった。パンフレットなどにQRコードを載せ、どこの地域か分かるようにすれば、道東圏のつながり、連携ができるのではないかと思う。

事務局：海外の事例などの提案があったが、身近なところで実現できることとして、喫茶コーナーの充実があげられる。日本でも最近だがミュージアムカフェが充実しているところが多い。当館でも展覧会ごとに独自のメニュー、フレーバーティなどの提供に力を入れてもらっている。そういう努力の結果、入館するとまず先に喫茶に立ち寄るお客様もいる。このようなことをもっと宣伝し、充実でたきたらいいと思っているので美術館で協力できることがあれば相談したいと思う。

道東の作家の活用についてはおっしゃるとおりである。帯広美術館にはたくさん子ども達に来ていただいている。市の中心部にあり、駐車スペースにも恵まれていることから小中学校の団体観覧が多い。一昨年は毎日のように団体へのオリエンテーションを行っていた。参加者数は4桁になった。一方で当館の大きな課題として高校生、大学生の観覧者数が極端に少ない。大学生については、地域に大学が少ないのでいたしかたないが、高校生については課題である。主体的に自分の意思で美術館に行きたいと思うようになる年代の学生が、美術館に来ないのは問題だと認識している。昨年は、管内で開催されている高校生の文化系部活動全国大会に積極的に働きかけた。高校生の無料観覧もなるべく実施したい。また、高校の出前授業の依頼があった場合は、極力対応するなどしたい。

ただ見てもらうだけでなく楽しんで見てもらい、鑑賞の質を充実させることはご指摘のとおり。各展覧会で設置しているクイズの内容の見直しも続けていく。

委員：子ども達の観覧についていろいろ意見をいただき、子ども達の美術芸術に対する力を高めたいと考えている現場の人間としてありがたい。各委員からの意見を検討して、子ども向けの事業を増やしていただければありがたい。

コロナ禍で帯広市の学校については、不特定多数の大人と接触することを避ける方針の中、

子どもが大人の中に入っていくことは今年度は難しい。来年度もどれだけできるかわからない。コロナが収まったからといって何パーセントの子ども達が来るのか、時間や交通手段を考えるとハードルは高い。帯広市内だけでなく十勝管内、道東各方面の子ども達に芸術に触れる機会があったらいい。どうしたらたくさん子ども達に芸術に触れさせられるのか。

出張アート教室は作品輸送費もかかり、事前の準備が必要なので急に実施できないことは理解する。今は一人一台タブレットを持っている。本物の作品を見ることも大事だが、タブレットを使いより身近に作品を見られる機会ができるのではないかと。

帯広市では11月に全市内小中学校40校の作品展を行っている。昔ながらの構図や決まったテーマの絵が多い。たまに工夫された構図の絵が見られるが、極端に変わっていない。たまに刺激を与えると発想豊かな違った作品が出てくるのではないかと思う。小中学校への出前授業の工夫も必要だと思う。

学習指導要領が新しくなり、社会に開かれる教育を進めている。コロナ禍ではあるが、外部講師の受け入れ体勢はできている。感染予防しながら、地域の人材や施設を積極的に活用することを進めている。それにうまく乗って学校に対し出前授業や出張アート教室の宣伝、アピールをすれば需要があるのではないかと考える。

委員：学校の年間スケジュールを決定するのは基本的に前年度であり、4月にはカリキュラムが決まっているため、美術館から学校へのアプローチは早い時期にお願いしたい。出張アート教室は例年7月に募集をかけているが、できれば前年度中に提案してほしい。

事務局：出張アート教室は道の事業なので制約があるが、当館独自の事業を行っている。反対に学校や市町村から要望を出していただき、日程、内容が調整できれば、市内、管内のみならず対応できる。ただし、教員ではない学芸員が対応するので授業はできない。授業の補足や総合的な学習の時間を使って美術鑑賞の仕方などの説明ができる。

委員：その形もありだが、学校から要望する形はハードルが高い。何を相談し、何をしてもらえばいいかわからず、手が付けられないところもある。美術館からこういうことができますというパッケージで提案があればいい。学校から希望を言うパターンとパッケージの提供と両方あればいいと思う。

事務局：管内の市町村からも同じような話があった。全部投げかけるのか、個別に対応するか検討しているが、ある程度美術館でパッケージは準備する。

委員：手島圭三郎展を楽しみにしていたが、休館になり残念だった。根室市の図書館でも20～30年前に展覧会があり素晴らしいと思っていた。あきらめていたが、NHKの番組を見て行きたいと思った。去年から行きたくてもいけない状況があり、リモートミュージアムを見るようになった。美術館に行きたいという動機付けになると思った。ただ時間が少し短いと感じたので長くしてもいいと思う。

根室から帯広まで4時間かかるので、帯広美術館に行きたいと思っても実際行く人は少ない。子ども達の世界もそうだと思う。出張アート教室は作品を持って行かなければならず大変なので、インターネット活用できないか。根室でも小中高生はタブレットを持つようになった。それを利用して美術の楽しみ方を伝えてくれたら興味が出てくるのではないかと。遠方の子どもの美術への興味をつなぐため、美術館から投げかけてほしい。何を聞きたいか、学びたい

か分からないのでメニューから選ぶことができればいいと思う。

高校生、大学生が美術館に足を運ばないということだが、高校生ボランティアを募れないか。美術を見るのではなく、子ども向けの事業があるときにボランティアとして活動してもらうなどすれば、そこから美術館への興味につながるのではないか。

委員：タブレットに配信はありかなと思う。ズームを活用してもいいかもしれない。

事務局：遠隔を利用して美術館で何ができるか検討しているところである。今後できることを示して行く。学芸課で1年かけてコンテンツを検討していくので期待してほしい。

手島圭三郎展は8月28日から道立文学館でも開催するので機会があればご覧になっていただきたい。

出前授業の相談は、根室の場合釧路の道立芸術館でも受けることができるので活用してほしい。

委員：現在200人位いるボランティアのなかで高校生が一人いる。土日しかできないのでライブラリー一部で活動している。未成年なので大人と同じ対応ができず、保護者から許可書をいただいて活動してもらっているがどこで責任をもって活動してもらえばいいのか分からない。若手の育成は大切だがその点で高校生をボランティアに勧誘するのは難しい。高校生をサポートすることは素晴らしいことなので、美術館と相談しながら募集をかけたい。検討する価値が十分あるので美術館にも協力してほしい。

委員：毎年、特別展とコレクション・ギャラリーの開催期間が同じである。同じようなテーマで必ずしも連動させなくてもいいのではないか。展示室だけでなくロビーを使って、ここに来るといつでも何かが見られるという状態を作れないか。

事務局：なるべく工夫をしているが、特別展とコレクション・ギャラリーの同時開催は長く続いている。これは快適性の維持、セキュリティ、コストの3つの問題からである。展示作業は絵を架けるだけではない。増作物や標示物の作成をロビーで行っている。快適な環境を求め来館したお客様に作業風景や騒音を見せたくない。特別展と常設展の開催をずらしている所は規模が大きい美術館であり、バックヤードに十分なスペースがある。

展示替え時は、貴重な美術作品の出入りがあり、盗難対策のため不特定多数の出入りを避けている。また、美術作品の運搬、展示は運送会社の美術専門班で行っている。かつては帯広に常駐していたが、現在は札幌から来てもらっている。コスト削減のため、特別展と常設展の展示替え作業を一度に行っている。これらを踏まえ同時開催が一番の選択肢と考え実施している。

委員：825点の所蔵作品を何年かけて全部見ることができるのか気になる。コレクションを常に見せられる方法を考えてほしい。コレクションが増えてくると10年も見ることができない作品が出てくるのではないか。それは寄贈者の意にも反することだと思うし、ただ持っていればいいという訳ではないと思うので。

事務局：今後も、主展示室を使ってコレクションを紹介する展覧会も考えていきたい。